

平成23年度「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」

『学校支援地域本部を円滑かつ効果的に運営委するための機能の再検証  
および「リーダー型コーディネーター人材」育成手法の開発』

## 成果報告書

奈良市地域教育力強化推進委員会

(様式4-2)

### 1. 実証的共同研究組織の構成

氏名	所属・役職等	備考欄
福岡 義郎	奈良市地域教育力強化推進委員会	奈良市教育総務部長
北 保志	〃	奈良市学校教育部長
向井 政彦	〃	奈良市市民生活部長
片岡 隆弘	〃	奈良市市民活動部長
森 誠康	〃	奈良市経済観光部長
冷水 毅	〃	奈良市教育センター所長
神田 義隆	〃	(財)奈良市生涯学習財団常務理事

### 2. 事業の実施体制

(体制図および役割については別紙1を参照)

#### ①事業主体

昨年度に引き続き、奈良市を母体とする推進委員会が事業主体となって実施した。教育委員会事務局教育総務部（地域教育課）、学校教育部（学校教育課）、奈良市教育センター、観光経済部（商工労政課、農林課）、市民生活部（市民安全課‘危機管理・防災担当’）、市民活動部（地域活動推進課）により構成し、会長は教育総務部長の福岡義郎が担う。

上記の推進委員会の下で、以下の構成者により実証事業を実施した。

◇奈良市地域教育力強化プロジェクト実行委員会

◇スーパーバイザー

◇ワーキンググループ

#### ②実証プログラムの実施連携先

地域住民と地元経済団体が地域本部を通して学校教育を支援するためのキャリア教育学習プログラム「学区ブランド産品開発プログラム（昨年度開発成果）」を、地域貢献・地域共生の観点からさらに精度を高め、モデル地域を拡大して実施するための連携体制を構築した。

### 3. 実証的共同研究のスケジュール

(スケジュールについては別紙2を参照)

### 4. 解決すべき地域の課題（地域の現状）

昨年度は、本市の地域経済力・社会教育力の双方の弱点に焦点を当てる発想から、教育界・産業界双方の機能を融合させ、発展させて、地域ぐるみの教育力・課題解決力の向上を図る担い手の育成と、その人材を配置し自律的に運営していく仕組みのあり方についての手法開発を企画し、実証研究を行った。

今年度は、地域課題の所在をむしろ近視眼的に発想し、地域本部のあるべき姿という機能性の問題に焦点を合わせることで、いかに学校を地域の中核的拠点とするか、その担い手に求められる資質や能力をどのように養成するべきか、という課題に取り組んだ。

## 5. 実証的共同研究の実施方法等

リーダー型コーディネーター人材の育成については昨年度の成果を活用し発展させ、地域本部の機能性研究については、新規の教材等の開発に取り組み、事業期間中に両方の取り組みを融合させるとともに、他地域への波及と意見交換を目的とした交流の仕組みもあわせて実施した。

### ①被災地の中学校における「地域本部の機能性」調査と教材および研修手法の研究開発

再委託先と、仙台市教育委員会の協力を得て、3校の学校と地域本部の関係者にヒアリング等の調査を行い、震災前後の状況について情報を得るとともに、具体的なアドバイスを得た。また、この情報を実行委員会および有識者等の意見なども参照しながら、もっとも効果的な教材の形式を判断し、研修計画の案を作成し、地域本部への関心や意識改革を図るための、「地域本部の機能性を考える（課題）」オプション教材を開発した。

（ヒアリング調査の概要については別紙3を参照）

### ②教材及び育成手法の研究開発

昨年度開発した「地域と学校をつなぐコーディネーター教本」を用いて、地域コーディネーターに求められる基本的知識等を習得する研修を実施した。この研修では、昨年度本事業で育成したコーディネーターが研修のファシリテーター役となり、リーダーとして活躍する場となった。これらの研修を通して、「教える側にまわる」ために必要なリーダー向け指導教本を作成し、来年度からの研修に活用することとした。

### ③教員研修プログラム・教育支援者研修プログラムの開発と合同研修の実施

地域本部事業を実施する上での課題に学校・教職員の理解があげられている。事業の理解と関心を高め、教職員の意識改革を目的とした教員向け研修プログラム開発について研究を進めた。

### ④地域や産業界と学校をつなぐキャリア教育プログラムの拡大展開

昨年度3学区で実施した「学区ブランド産品開発プログラム」について、モデル地域をさらに2つ増やして計5学区で実施した。

（各モデル学区の取組については別紙4を参照）

#### ⑤コーディネーターの意欲を高める修了証明制度の研究

昨年度に引き続き、地域コーディネーターに対して機能別研修を行うとともに、コーディネーターが教える側に立てるようになってきている。また、名刺を作成するなど、地域コーディネーターとしての自覚が育ってきた。研修の受講に対するポイント制や認証制度の確立までは進めなかったが、来年度に向けて研究・開発を進めていく必要がある。

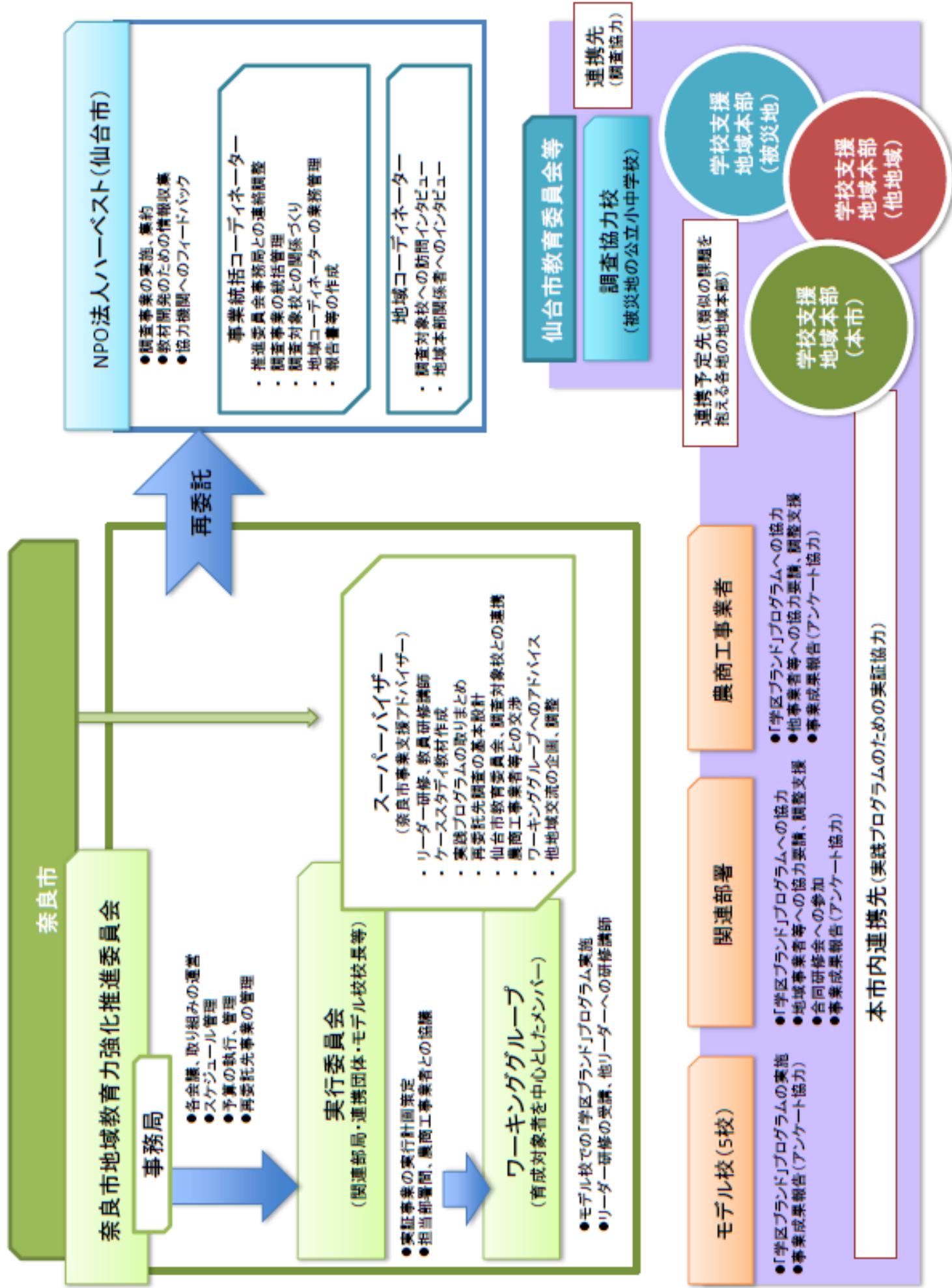
#### ⑥他地域との交流

今年度は、再委託先の調査協力校である、石巻市立雄勝中学校との交流事業を企画、実施した。3名の地域コーディネーターが参加し、リーダーとしてのアイデンティティの確立、学校と地域本部の関係等についての俯瞰した視点の獲得を目指した。

### 6. 実証的共同研究で得られた成果

- ① 避難所運営の状況を、地域と学校との関係づくりという視点で調査した「地域本部の機能性」調査は、本市のみならず全国の地域本部事業に高い関心を抱かせるテーマであり、これからの組織体制づくりのあり方を見直すきっかけとなる。また、この情報をもとに作成した教材および研修の手法については、普及の可能性が高まると考える。
- ② 「コーディネーター教本（昨年度実績）」「地域本部の機能性教材」等を使用し、地域住民自らが学びあう仕組みづくりとして、リーダー型地域コーディネーターの育成を兼ねた研修手法を開発・研修することにより、社会教育の担い手の育成と発掘につながった。
- ③ 昨年度開発した、地域住民と地元経済団体が地域本部を通して学校教育を支援するためのキャリア教育学習プログラム「学区ブランド産品開発プログラム」を、5学区に拡大したことにより、本研究事業に対する認知度が高まるとともに、学校教職員の協力が広がったといえる。
- ④ 他地域交流事業として、再委託先の調査協力校である石巻市立雄勝中学校の地域コーディネーター・教職員と本市の地域コーディネーターが意見・情報交換・交流の場をもてたことは、自らの地域教育のあり方を見直す機会をなるとともに、今後の活動の糧につながったといえる。

# 別紙1 2. 事業の実施体制図と役割





### 別紙 3

#### ①被災地の中学校における「地域本部の機能性」調査と教材および研修手法の研究開発

##### 【ヒアリング調査の概要】

###### <宮城県仙台市立富沢中学校>

###### ○学校と地域との関係（学校長コメントより）

「普段から学校支援地域本部事業として、土曜寺子屋や地域連携防災訓練、学習サポーターなどを通して地域のボランティアを多く受け入れていた。実際のところ、“こうした方々の出番をつくる手間”もかかっていたのは事実であるが、そうしたつながりが今回の震災対応には大きく活かされたと思う。今後は定期的な関わりから日常の関わりへとしていきたい。」

###### ○避難所運営について（学校長コメントより）

「震災の2週間前に避難所運営委員会を開催し、委員長などを決めていたことが功を奏した。また、地域の方々と普段からの顔の見える関係が、避難所の運営に大きく活かされ、当日の1,200人の避難民への対応において、教員と地域の方々の役割分担の意識にもつながった。しかし、物資の備蓄や全体の管理運営において教員側に大きな負担があったことは確かで、次への備えをしっかりとしなければ現場の理解・納得は得られないだろう。」

###### ○学校と地域との関係（地域コーディネーターコメントより）

「年に2度、近所の川清掃の取り組みに地域の方と一緒に生徒がボランティアで参加しているが、地域の人と話す機会も増え、この積み重ねが生徒の意識を変え、地域の方々からの視点も大きく変えた。直接接点を積み重ねることで、大人が目線が変わり、“何でも言ってくれば協力するよ”という信頼関係に繋がったのだと思う。」

###### ○学校と地域との関係（学校長コメントより）

「避難所運営の際、教員と地域の方が協力をして本気になって動く姿を見た生徒たちは、自然と誰かの役に立ちたいという思いを持ち始めていた。とある学校では先生が職員室から出てこなかったという声も聞くが、やはり、普段の顔の見える関係性が非常時の協力につながり、そんな大人を見た生徒たちが本気で動き出せたのだと思う。何かをしたい、という生徒への仕事を探したほど、彼らの意欲は高まっていた。」

###### <宮城県仙台市立加茂中学校>

###### ○学校と地域との関係（学校長コメントより）

「学区が非常に広く、加茂の団地は高齢者が多いこともあり、震災後は多くの住民が避難をしてきた。しかし、こうした非常時に備え、震災2ヶ月ほど前から連合町内会や各種関係者、学校が連携をして避難所運営マニュアルづくりを進めていたため、学校に負担が偏らず、スムーズな避難所運営・協力体制ができた。」

### ○学校と地域との関係（学校長コメントより）

「小中学校が隣接し、住宅団地の中にあることから、普段から町内会の方々との交流や見守りの環境があった。そうした関係が震災時の協力体制に繋がった。」

### ○学校と地域との関係（学校長コメントより）

「非常時に備え避難所運営マニュアルづくりを進めていたが、今回の震災で想定していなかった問題もたくさん起き、そうした場合の対応策も踏まえた上で、再度見直しをしていきたい。」

### <宮城県石巻市立雄勝中学校>（※注1）

#### ○学校と地域との関係（中学校・保護者のコメントより）

「楽しそうに学校にかよう子どもの姿に気が晴れる思い。震災直後、一週間ほど子どもと再会できなかったため、子どもと一瞬でも離れたくないという気持ちにとらわれていた。そのことが子どもの負担になっていたと思う。学校がやってくれるさまざまな行事に子どもを預けることで、ようやく「子依存」から解放された。」

「いまはなにもかも、学校に頼り、先生方に相談に乗ってもらっている。もともと地域と学校との距離は近かったと思っていたが、震災を契機にあらためて「学校」というものの存在について、すべての保護者が見直している。」

#### ○学校と地域との関係（雄勝中学区内小学校教員）

「市内の大きな避難所はコミュニティがないのでなにもかも教員任せだった。学校と地域との関係ということばは何年も前からあったのだが、応えてくれる地域あってこそだと痛感している」

「学校教育は、10年後の地域復興の主人公を育てているのだという、確かな手応えを感じている」

「自治会等の既存リーダーは、リーダーではなかった。実際には40代50代が最悪の時期を支えていた。」

## 別紙 4

### ④地域や産業界と学校をつなぐキャリア教育プログラムの拡大展開

#### 1. 目的

昨年度3つのモデル学区で実施した「学区ブランド産品開発プログラム」について、モデル地域をさらに2つ増やして、計5学区で実施。地域コーディネーターに対する期待の項目のうち、「子どもの学力、コミュニケーション力を高めることができる」について、教職員の期待値が著しく低いのに対し、保護者の期待値が非常に高いというこのギャップについて、地域コーディネーターが自ら埋める企画・提案力をつけることを主目的とし、平行して、プログラムの実践上必要となる商工農業者との連携体制を強化する。

#### 2. ワーキンググループ（WG）の設置

昨年度に育成事業に参画し、リーダーの資質と意欲を備えた地域コーディネーターを中心に構成。新規モデル学区の地域コーディネーター（今年度新規育成対象）含めた学校支援プログラムの実働グループ。モデル学区における「学区ブランド開発プログラム」の企画と実施を担当する。

#### 3. モデル学区

昨年度の3モデル学区に加え、新たに2学区を追加し、「学区ブランド産品開発プログラム」の新規バリエーション開発と実施を通して、このプログラムの汎用性を高めるための実証に取り組む。

- ・継続モデル学区（月ヶ瀬中学校区・富雄中学校区・都南中学校区）
- ・新規モデル学区（二名中学校区・飛鳥中学校区）

#### 4. ワーキンググループ（WG）会議

第1回WG会議…平成23年9月29日(木) 15:00～ 第2研修室にて

(内容)

- ・事業説明と各校区の紹介を行う。その中で、本事業は地域と学校、コーディネーター間だけでなく農政商工関係、行政が一体となったものにしていくことを確認し、グループで話し合っ進めていくことの目的を伝える。
- ・昨年度の実施校区のコーディネーターによる、児童生徒の様子、コーディネーターの発見や気づき、新規校へのアドバイスを中心に・パワーポイントや写真で紹介した。
- ・WG会議には、担当課以外からも委員として構成していることから、学校教育課の指導主事には、地域の人材とともにキャリア教育のあり方の再考をお願いし、商工業界の関係者には、地域の教育力、課題解決能力向上を図る「人づくり」に協力を求めた。

第2回WG会議…平成23年11月1日(火) 15:00～ 第2研修室にて

(内容)

- ・学習プログラム開発における説明と、ワークシートを用いての作業を行った。作業においては、キャリア教育として、学区ブランドのテーマを決め、各教科領域の中でどのようなねらいを持つのかを記入した。
- ・グループ作業の後、各校区から今年度の取組の方向性について発表し、昨年度経験している校区から、新規校区に対して助言を受け、これからの活動に対する心構えとした。

第3回WG会議…平成24年2月2日(木) 14:00～ 第22研修室にて

(内容)

- ・これまでの取組と進捗状況について、各モデル校区より報告をし、プロジェクト実行委員長及びスーパーバイザーよりアドバイスを受ける。その後、3月4日の調査活動に向けて

確認する。

5. 各モデル学区の取組み  
別紙

6. 調査活動

(日時)

・平成24年3月4日(日) 11:00~15:00

(会場)

・奈良もちいどのセンター街 マーチャントシードセンター

(趣旨)

・5学区が地域の協力者とともに、学校で調査・研究開発した「学区ブランド産品開発プログラム」の成果を発表し、アンケートや聞き取りなどの調査活動により、商店街や参加していただいた皆さんの意見を聞き、更なる発展につなげる。

(内容)

・調査活動については、別紙

## 【月ヶ瀬中学校区】

### 1. テーマ

「月ヶ瀬サイエンスⅡ」

### 2. テーマの概要

昨年度の「月ヶ瀬サイエンス」に続き、2年目の取組となったが、学校行事の「ふるさとウオーク」で月ヶ瀬の梅林について学習する中で、生徒から「どうして月ヶ瀬で梅が栽培されるようになったのか」という疑問の声が出てきた。今年度は月ヶ瀬で梅が栽培されるきっかけとなった烏梅が、紅花染めにどのように使用され、どのような点で優れた商品作物であったのかを考察するとともに、新たな学区産品の開発に向けて次世代のコーディネーターの育成を図りながら、総合的な学習の時間の新たな学習内容の創造を図る。

### 3. プロジェクトを通して育てたい力

小規模校の少人数の生徒たちが、学習を通して郷土の良さに気付き、それを自分のことばでしっかりと考え、多くの人に伝えようとする意欲を培う。

烏梅製造が過去に郷土の主要産業であり、月ヶ瀬梅林のもととなり現在の観光資源となっていることから、梅を守り育ててきた郷土の歴史に学び、地域への誇りと愛着の心を養う。

### 4. 各モデル校におけるWG会議

9回開催

### 5. 活動内容

講演会「月ヶ瀬と梅」、ゲストティーチャー授業「紅花染めと私」、紅花染め用灰汁、烏梅液づくり、紅花染め実習と染色実験、産品仕上げ作業（アイロンがけ）、新規開発産品の製作、学区産品確認

※活動における生徒の声

- ・昔と今の梅の木の木の本数の違いに驚いた。
- ・これから、梅の木を大事にしたい。
- ・烏梅が染物屋などに高値で売っていたことを初めて知った。
- ・お水取りで使われるツバキの造花に月ヶ瀬の烏梅が使われている話が印象に残った。
- ・この美しい月ヶ瀬をこれからも守っていきたいと思った。
- ・谷崎潤一郎や福沢諭吉などが訪れた月ヶ瀬は、改めてすごいと思った。
- ・作るのは楽しかったです。学区産品という一種の商品なので、丁寧にしなければならなかったが、調査に協力いただいてやったかいがありました。
- ・大勢の人前で発表する機会はこれまであまりなかったけれど、ちゃんと発表できたので自信がいった。
- ・はじめは他の人に気に入ってもらえるか心配だったけれど、みんなが「きれい」といってくれてうれしかった。
- ・たいへんだったけど、すごく楽しかった。

## 6. 地域における効果的なネットワーク化・人材養成手法の開発について

### ①コーディネーターとして関わり方

中学校での総合的な学習の時間の計画を尊重しながら、限られた時間で有効な支援が行えるよう、学校側と打ち合わせを行い、時間割変更なども考慮に入れながら調整を図る。

### ②コーディネーターとして得られた成果

学校での授業の進め方を調整していく中で、中学校での学習がどのように行われているのを知ることができた。

烏梅製造の歴史や紅花染めとの関係などについては、地元でも詳しく知る方が減っていく中で、月ヶ瀬梅林の成り立ちに烏梅が深くかかわっていたことを知ることができた。

### ③コーディネーターとしての難しさ、課題

授業時数の関係で、作業中心の時間を取る必要があるので、新しい提案を行って授業内容を調整するための時間が少なくなってしまった。調整のための時間を多くとる必要がある。

## 7. 学校と地域の総合的な活性化

### ①学校の受け止めや関わり

関係する学年の教員は、協力的で事前指導などきちんと行われている。生徒たちも意欲的に学習する姿勢で臨んでくれた。

### ②教職員への理解や協力

担当学年の先生方に、準備や学区産品の仕上がりチェックなど時間数不足を補う活動をしてもらった。

### ③地域の協力や支援

烏梅を使った紅花染めについて地域にお知らせしたところ、興味をもった方にゲストティーチャー授業に参加していただくことができ、紅花染め実習では生徒の班に加えて大人の体験班をつくって一緒に活動してもらうことができた。

調査活動日には、公民館所蔵の烏梅いい説明写真などをお借りすることができた。調査活動日に、地域の方に多数お越しいただいた。

## 8. 子どもへの効果

調査活動における接客体験や、多くの人を前にしての発表など緊張する場面もあったが、体験を通して積極的に発表し郷土の良さを伝えようとする意識が高まった。

## 9. 成果と課題

地元の人々の中に「烏梅」や「紅花染め」に関心を持つ方を増やすことができた。

子どもたちが調査活動を通じて、積極的に発言し郷土の良さを発信しようという意欲を持ってよかった。

調査活動までに学校が割り当てられる授業時間が、時期的に修学旅行事前学習をしなければならぬ時間と重なって、十分確保できなかった。プロジェクト全体の開始時期が早まることを希望する。

## 10. 学校側の考えや意見

総合的な学習の時間の枠で行っている「ふるさと学習」の内容との関連で、地域の歴史と深く結びついた「烏梅」について実習を含めて学習できたことは大変意義のあることである。また、生徒たちが地域の方々に直接指導をしていただいで学習を深めることができ貴重な体験をさせていただいたと考えている。

## 【都南中学校区】

### 1. テーマ

「カレー都南（カレーとナン）」

### 2. テーマの概要

学区ブランド産品として昨年都南のなんをもじって開発した「カレー都南」、今年はその第二弾。12月に行われる都南中学校区の地域合同イベントに「カレー都南」を販売しPRしようとして計画した。今回も地元の産物を使用して新しいナンの考案をしたところ、中学校区の精華小学校では11月中旬に地域になっている柿約3,000個を使ってつるし柿作りをしているので、その時に出た柿の皮を粉末にしてナンの中にすり込むことにした。また柿の果肉も入れて柿色のナンにしあげた。カレーにも味がまろやかになるようにと隠し味に柿の果肉をいれるなどして新商品を開発した。

### 3. プロジェクトを通して育てたい力

地域の特産品を活用し、学区ブランド産品を開発することで想像力や表現力を向上させる。また、地域の方々との関わりを持つことによってキャリア教育を促す。

### 4. 各モデル校におけるWG会議

13回開催

### 5. 活動内容

生徒会役員へのプロジェクト説明、カレー都南の試作、柿の皮むき、事業内容の検討、カレー都南調理、生徒会役員と作業内容について、カレー都南の調理と最終打ち合わせ

※活動における生徒の声

- ・今回のプロジェクトに参加して「お客様に対しての言葉遣いや礼儀」などを学ぶ事ができた。買って下さったお客様が、「ありがとう」「おいしかったよ」などの言葉をかけてもらった時は、本当にうれしかった。その言葉があったからこそ、全て商品が売ることができたと思います。全てのお客様に感謝している。
- ・カレー都南に参加して何よりも楽しかった。一番苦労したことは、ナンの生地厚さなどの調整だった。当日は販売より、呼び込みを中心に活動しました。色んな人に「頑張ってる」などと言われ、嬉しかった。
- ・前日の準備からみんなで一生懸命、頑張って作りました。当日、ドキドキしながらも行った結果、見事完売できました。お客さんが、みんな「美味しかった」などほめて下さったので、私たちも、楽しく販売することが出来た。
- ・めったに出来ない経験だったので、これからの活動につなげていけたら良いと思う。
- ・都南プロデュースの「カレー都南」に参加して、都南中の代表のものを他の小中学校の人に知ってもらえた良い機会だと思った。自前準備で疲れたけど、完売できたので良かった。これからもっと発展させていきたい。
- ・カレー都南に参加して、地域活性化に少しでも貢献できたのであればうれしい。売っていた時、食べ終わったお客様が、「おいしかった」や「ありがとう」などの言葉を、笑顔と共にかけてくださることがなによりのお代であり、売る側としての最高の喜びであった。「また食べたい」と言ってくださったお客様のために、これまで以上のものを出し続けていくことが、販売する側としての義務でもあると思う。
- ・こういう経験は初めてだったので、すごく緊張したが地域の人や協力してくれた人たちのおかげでスムーズに働くことが出来た。協力してくれた人たちに感謝したい。

## 6. 地域における効果的なネットワーク化・人材養成手法の開発について

### ①コーディネーターとして関わり方

地元の産物を使った新しいアイデアを生徒たちから引き出す努力と、そのアイデアを生かす努力をした。

### ②コーディネーターとして得られた成果

地域の拠点となる中学校において学校と地域との関わり的重要性を改めて実感した。また、災害時での避難場所である中学校で、生徒たちとともに炊き出し訓練の実施にもなったのではないかと思う。

### ③コーディネーターとしての難しさ、課題

短期間で、また時間の余裕がない中でのコーディネートの方法。今後、この事業をどのように活用していくか。

## 7. 学校と地域の総合的な活性化

### ①学校の受け止めや関わり

学校(教職員)が主導し、計画・立案・生徒の指導をすることについては消極的であった。しかしあくまでもこの事業は、学校を組みこんだ形での地域教育力強化が狙いであり、地域コーディネーターが主導する事業であることを理解して協力を得ることができた。言うまでもないが事業の受け入れには、管理職の意識や姿勢が左右する。

### ②教職員への理解や協力

まず学校長に対して事業への理解と協力を求めた。その後、学校長を通じて教職員への周知を図り協力を求めた。その後は主幹教諭・生徒会担当・当該部活顧問と意思の疎通を図りながら、生徒たちの活動を導き出すことができた。活動全般を通じて、教職員との連携も図れたと感じている。

### ③地域の協力や支援

本事業は、活動2年目ということもあり、今年度は学校支援地域本部(SAKURAネットワーク)として受け入れ体制を整えた。地域の柿を利用したナンを発案するなど、昨年度とは比較にならないほど地域の理解と協力を得ることができた。

## 8. 子どもへの効果

「やればできる」という自信が芽生えた。コーディネーター等、地域の方々の支援があって実現した取組みであり、改めて感謝の気持ちが芽生えた。生徒会活動や参加した部活の活性化が図れた。

## 9. 成果と課題

2年間の事業をとおして、「カレー都南」が多くの人たちに認知されたことは、都南中学や都南校区が、多くの人たちにその存在や取組みが認められたことであり、この事業の成果と捉えている。また、子どもへの効果が明らかに確認できたことも成果と考える。一方で、負担感の増大や活動のマンネリ化が懸念されると同時に、協力者の広まりの観点では不十分さを感じる。

## 10. 学校側の考えや意見

参加した生徒にとっては、達成感や充実感を得ることができる、面白い取組みであると考えられる。ただ、生徒会や部活動など限定的な取組みとしては可能であるが、学校全体として年間計画に取入れた形では無理があるように思われる。また、コーディネーターさんの負担を考慮すると、学校側から積極的に協力依頼できる事業ではないように感じる。

## 【富雄中学校区】

### 1. テーマ

「古代米を使った富雄のお菓子作り」

### 2. テーマの概要

富雄地区には特に代表されるような農作物、産品がないため、昨年度経験した鳥見小学校の『古代米プロジェクト』を継続、発展させ、古代米を使ったお菓子の開発、商品化に取り組んだ。

### 3. プロジェクトを通して育てたい力

このプロジェクトを生きたキャリア教育ととらえ、ひとつの商品が出来上がるまでの過程を経験することによって、その難しさややりがいを感じ、チームで問題を解決する力を育てる。また外部協力者（大人）との交渉を経験することによってコミュニケーション能力を高める。

### 4. 各モデル校におけるWG会議

25回開催

### 5. 活動内容

ゲストティーチャー事前授業、ゲストティーチャー授業、募集説明会、実行委員会、ネーミングチーム・パッケージチーム活動、ネーミングチーム、アンケート集計、商品開発チーム・ネーミングチーム、試作、パッケージチーム活動、商品開発チーム活動、企画（元ネーミング）チーム活動、企業と商品開発

※活動における生徒の声

3月4日調査活動のアンケートより（回答：24人）

- ・お客様に敬語が使えた・・・はい（24人）、いいえ（0人）
- ・お客様に笑顔で接した・・・はい（20人）、いいえ（4人）
- ・商品について説明ができた・・・はい（18人）、いいえ（6人）
- ・仕事は全力でできた・・・はい（22人）、いいえ（2人）
- ・みんなと協力した・・・はい（24人）、いいえ（0人）
- ・大人の注意を聞いた・・・はい（23人）、いいえ（1人）
- ・準備・片付けはきちんとできた・・・はい（21人）、いいえ（3人）
- ・マナーを守れた・・・はい（20人）、いいえ（4人）
- ・他校区の取り組みを見た・・・はい（21人）、いいえ（3人）

3月12日（月）反省会・アンケートより（回答：35人）

- ・活動全般について・・・楽しかった（32人）、楽しくなかった（2人）、無回答（1人）
- ・チームについて・・・楽しかった（28人）、楽しくなかった（6人）、無回答（1人）
- ・チームでの活動は・・・しやすかった（28人）、しにくかった（6人）、無回答（1人）
- ・コーディネーターは・・・頼りになった（33人）、頼りにならなかった（2人）
- ・またこんな活動に参加したいか・・・はい（21人）、いいえ（14人）

「3月4日はみんなが協力してとてもよい日になった」「楽しいプロジェクトだった」「売るのは大変だと思った」「お客さんに買ってもらって食べてもらったからがんばった意味があったと後で思った」「やりがいがあった」「商品化できて感動した」「難しかったけどおもしろかった」「いろんな人とコミュニケーションがとれた」「参加してもメリットがない、保護者の自己満足」

## 6. 地域における効果的なネットワーク化・人材養成手法の開発について

### ①コーディネーターとして関わり方

商品決定時、開発時、調査活動時それぞれのチームにコーディネーター2～3名が担当者としてつき、チームの一員として生徒と共に活動した。

### ②コーディネーターとして得られた成果

ひとつのプロジェクトを進めていくことでバランスをとることの大切さを感じた。特に生徒達に対しては、普段の活動（大人ボランティアとの対応）とは違った難しさ、楽しさを経験することができた。また、外部に協力者を求める作業はいい経験となった。

### ③コーディネーターとしての難しさ、課題

コーディネーター間の協力体制には自信があったが、それぞれに仕事、家庭があり、時間調整をしながらの活動であったので、十分な横の連携がとりきれいでなかった。

## 7. 学校と地域の総合的な活性化

### ①学校の受け止めや関わり

年度途中からの取り組みということもあって、全校あげての体制とはならなかったが、概ね教職員、生徒とも協力的であった。

### ②教職員への理解や協力

地域教育協議会会長から職員会議で提案していただいたこともあり、全教職員の理解を得ている。主にプロジェクト参加生徒の学級担任や部活顧問が協力的に支援した。

### ③地域の協力や支援

学校、行政以外にも広く発信することによって貴重な協力者を多数得ることができた。また、地域からの応援はもちろんのこと、企業なども子ども達、学校、教育に対する関心が高いことを知るいい機会となった。

## 8. 子どもへの効果

活動スタート時から比べると、終盤ではめざましい成長があったと感じる。ただ、楽しいことと受け止めるだけでなく、『仕事』としての責任、チーム内での自分の立場などを感じながら活動できるようになってきた。

## 9. 成果と課題

生徒にとってもコーディネーターにとっても貴重ないい経験となった。実際に企画、開発した商品が販売されるまで体験できたことは、生徒にとって大きな達成感を得ることが出来た。コーディネーターにとっても、そこに至るまでの過程で多くの協力を得ることが出来、今後の活動にも活かせるものとなった。ただ、今回は活動のほとんどが一部の生徒にとどまり、学校全体の取り組みとはならなかったことが残念であり、またこういう活動の難しさでもあると感じる。

## 10. 学校側の考えや意見

生徒達に通常の学校での学習では経験することができない、貴重な体験をさせることができた。また、すばらしい力をつけることができた。

## 【二名中学校区】

### 1. テーマ

「つるし柿プロジェクト」

### 2. テーマの概要

昔ながらの奈良の原風景の再現。古人の知恵や体験を通して知り、体得することで改めて郷土を再発見する。

木になる柿の実を見たことはあるだろうが、実際に渋柿を手に取りつるし柿製作作業することで柿を今まで以上に身近に感じてもらう。「渋」をはじめて経験する子もあり柿を通して不思議・好奇心・工夫を体験する。小学生の作った干し柿を利用して試作を重ねたクッキー製作。調査日にあわせてプロジェクトアピールのためのオブジェ制作・小学生によるクッキー用小袋のイラスト制作。調査日は子どもたち自身が会場・商店街でプロジェクトのアピール活動を地域の方々に説明し、アンケート調査を行う。小学生中学生とグループで活動することで異年齢交流をはかる。

### 3. プロジェクトを通して育てたい力

「渋」をはじめて経験する子もあり柿を通して不思議・好奇心・工夫を体験させる。渋柿を体験し、郷土愛を。不思議だなあと思う好奇心・探究心。作業を通じ物づくりの心、作り出す楽しさ・大変さ・達成感。道具を使う作業での技術力の向上。起業・商品化にむけた興味づけ。学校外での社会性・コミュニケーション能力。失敗を恐れず自分の力を信じ行動をすること。

### 4. 各モデル校におけるWG会議

25回開催

### 5. 活動内容

つるし柿材料の渋柿撒果、つるし柿作製、西吉野村奈良県農業総合センター北條雅也先生による柿の出前講演、パッケージの原画イラスト作成、プロジェクト経緯説明・柿をつかった食品・オブジェ製作検討、干し柿を利用したクッキー試作製作、調査日にむけて衣装・アンケート内容検討・活動概要説明・チラシ等企画、つるし柿オブジェ作製、つるし柿オブジェ作製、干し柿・クッキーの試食とアンケートの依頼

※活動における生徒の声

- ・干し柿は甘くおいしいのに材料の柿はにがいのが不思議。
- ・柿の皮むきはむずかしかったけど楽しかった。
- ・季節を感じる行事は地域をとうしてしかできないので参加できてよかった。
- ・皮をちょっとなめただけなのにずっと口がにがくておかしい。
- ・藁縄をなうのはむずかしかった。
- ・全く知らなかった柿の種類を教えてもらえてうれしかったです。
- ・実物をさあわけておもしろかった。たくさん質問させてもらった。
- ・全く知らない柿がたくさんあった。
- ・私は絵を描くのが大好きなので今日はとても楽しかった。
- ・すごく緊張したけどうれしかった、中学生がアドバイスしてくれてよかった
- ・はじめは積極的にお客様に声をかけられなかったが、徐々に慣れてパンフレットをももらってもらい、クッキーもおいしいと言ってもらって作った甲斐があった。無視される方もありこれが仕事だとおもった。

## 6. 地域における効果的なネットワーク化・人材養成手法の開発について

### ①コーディネーターとして関わり方

心の持ちかたとして事業に楽しくかかわる・楽しむ。小学校（2校）に事業案内等配布を依頼。地域ボランティア登録者から人材のほりおこし。公民館利用により作業の効率化、地域へのアピール。

### ②コーディネーターとして得られた成果

子ども主体になることで作業・考えを子ども目線で考えることができた。子どもの積極的な活動・楽しむ子どもの顔を見ることができた。子どもの可能性・能力の大きさを感じた。限られた時間の中でコーディネーターのそれぞれの得意分野など作業を分担して活動することが効率を高めることもあった。

### ③コーディネーターとしての難しさ、課題

まだまだ地域にも学校にもコーディネーターのかかわりがまだまだ希薄。学校現場との調整、担当者との進め方など。コーディネーターの時間の捻出。子ども・保護者に気づくのを待つ事の難しさ。

## 7. 学校と地域の総合的な活性化

### ①学校の受け止めや関わり

学校は小学校・中学校ともに協力的だった。事業案内等配布、アンケート回収に協力してもらった。時間外の活動であっても子ども、コーディネーターを見届けてもらっている。

### ②教職員への理解や協力

管理職の意識で教職員への伝わり方は変わると感じた。教職員の理解はあっても協力は個人差ある。コーディネーターの顔見える活動、先生方の声の聞こえる活動が必要。

### ③地域の協力や支援

地域において地域教育協議会に自治連合会会長も加わっている所以活動を知っていただき理解も示していただいていたが、地域住民への周知は学校支援の活動とともにまだこれから。学校保護者には参加案内、調査日チラシを配布した。つるし柿作業では保護者の参加もありボランティアとして活動に参加していただいた。子ども達が調査活動するにあたり元アナウンサーである地域ボランティアの方に、言葉を伝える方法を伝授していただきました。

## 8. 子どもへの効果

つるし柿作業をとおしてあまり関心のなかった柿を見たり、食べたりするようになった子があつた。中学生と小学生と一緒に作業（クッキー製作）では互いに協力。活動に時間とともに積極的にかかわるようになった。ボランティアの保護者・コーディネーター・グループ組んだ子ども達と調査日には協力し合い、協調性学校と違う社会性を体得した。

## 9. 成果と課題

楽しく活動することにより中学生小学生ともに子ども同士の和・輪がひろがった。美術部家庭部には普段活動を見てもらう場が無いので子どもの成果を発表するいい機会であつた。コーディネーターも時間のやりくりしながらの活動で、それぞれ得意分野で、作業を手分けして活動した。天候で柿の成熟、ほし柿のできが変わるので均一した製品は得にくい。

## 10. 学校側の考えや意見

単一校での活動でなかつたので、学校ごと考え方が少しずつちがっていた。中学では時間に追われる生徒を初めなかなか協力的に動いてはもらえなかつたが、部単位での協力を先生方をお願いしたら、子ども達の方が積極的にかかわってくれるようになった。小学校においては開催場が中学校でということもあり見守っておられたが、活動の中味の理解とともに協力的であつた。

## 【飛鳥中学校区】

### 1. テーマ

「飛鳥えびす」

### 2. テーマの概要

飛鳥えびす Vol.1 いのファーブーツプロジェクト  
飛鳥校区の歴史をひもとき、奈良奉行の東の境界である市ノ井の再現。  
売られていたイノシシの毛皮の和沓「綱貫」を再現する。

### 3. プロジェクトを通して育てたい力

飛鳥で育ち、飛鳥で学ぶことに誇りをもつこと歴史に思いをはせ、想像力と実行力をのばす  
ことものつくりの大変さや達成感をあじわう。

### 4. 各モデル校におけるWG会議

7回開催

### 5. 活動内容

皮処理の方法を確認・せんの借入、イノシシの皮を柔軟剤につけこむ、WG員・生徒の  
顔合わせ、自己紹介、皮の確認、「綱貫」の実物を借入、毛皮のなめし（せん打ち・薬  
剤つけこみ）、毛皮のなめし（脱水・毛のリンス処理・干す）、視察受け入れ、紙・不  
織布・フェルトで和沓試作、調査活動うちあわせ、恵比寿神社散策・清掃、毛皮油脂ク  
リーム処理、毛皮実験（切れ端で熱湯処理・磨き等）、毛皮で綱貫作成・調査活動資料  
作成、調査活動看板製作、綱貫仕上げ・展示資料・配布しおり作成、展示資料しあげ

※活動における生徒の声

- ・何をすればいいのかわからない。
- ・手袋をはめても毛皮にさわるのがきもちわるい。こわい。
- ・毛皮に触るのになれてきた。実験でどうなるのか興味がわいた。
- ・思ったより毛皮がかたく、作るのがむずかしい。調査アンケートで一般の人が綱貫を  
どう感じるのか聞いてみたい
- ・他校の展示がきれい。他校の取り組みの仕上がりがすごいし試食もおいしかった。ア  
ンケートで最初は声をかけにくかったが、後半は積極的にいけた。飛鳥の取り組みを  
多くの人に見てもらえてよかった。綱貫をはいてもらった。配布したしおりがよろこ  
んでもらえた。
- ・プロジェクトをとおして、貴重な体験ができてよかった。いい思い出になった。調査  
活動は大変だったけどいい経験になった。次回は違うものを作りたい。

### 6. 地域における効果的なネットワーク化・人材養成手法の開発について

#### ①コーディネーターとして関わり方

プロジェクトに必要な物品、情報の提供をする。生徒たちとともに作業し、プロジェクトを  
すすめる。

#### ②コーディネーターとして得られた成果

生徒と積極的に話し、生徒たちのバイタリティーにふれることで、大人として伝えることの  
大切さを再確認。また、企画実現のために必要な段取りや手法を考えて、それぞれのコーデ  
ィネーターができることを自らみつける。

### ③コーディネーターとしての難しさ、課題

伝えたいことを的確に伝えることの難しさ。中学校での活動では授業として取り組むには教職員の理解をえるのに時間がかかり難しい。プロジェクト内容について、知識があまりない状態ですすめたため、方向性を定めるのに迷いがあった。計画的に進めるための無駄のない時間配分の大切さを感じた。校区プロジェクトとして、小学校への認知不足であった。

## 7. 学校と地域の総合的な活性化

### ①学校の受け止めや関わり

中学校長による、モデル校受け入れ提案であり、こども達と新しいことにチャレンジすることで、学校を活性化させ、小中一貫や、周年行事へのつながりもふくめて、積極的に地域とつながろうとしている。

### ②教職員への理解や協力

年度途中での新プロジェクトで、教職員の積極的な理解や協力をえることは難しく、状況報告をするのみになっていた。中学生ということで、こども達の自主的な活動をサポートしなかったため、教職員からの指導を求めなかったことにもよる。部活でのプロジェクト取り組みということで、顧問の教職員がかかわり、調査活動に参加して初めて、プロジェクトへの理解がなされ、今後への期待が感じられた。

### ③地域の協力や支援

プロジェクト周知への時間がなく、協力していただけるWG員や協議会メンバーのみで動いていた。プロジェクト内容を早めに明確にすれば、支援してほしいことがらも具体的になり保護者の協力なども多くなっていたかもしれない。

## 8. 子どもへの効果

中学生の部活動時間でのプロジェクトとし、自主的な活動を期待した。プロジェクトに対する理解は別にして、目の前にある作業を進める、という形であった。イノシシの皮を扱うことで、好奇心が刺激され、日を追うごとに積極的に取り組むようになってきた。調査活動をする中で、他校の様子を知り、校外で人と接することで、自己表現を積極的にできるようになった生徒が目立った。後日アンケートでは達成感や満足感をあらわし、次回への取り組みに言及する生徒も多かった。

## 9. 成果と課題

プロジェクトをとおして、「飛鳥えびす」の第一段階が終わったところと考える。無理じゃないかと思っていたイノシシの毛皮の和沓再現をこども達が形にしたことで、「やればできる、信は力なり」の飛鳥中の心を感じた。市の再現という「飛鳥えびす」の最終段階まで、次は教職員や地域への理解と支援の拡大、小学校への周知と協同が課題。

## 10. 学校側の考えや意見

学校内の活動としては、授業カリキュラムが優先となるが、真に生きる力を得るための地域とのかかわりや、新しいことへのチャレンジ力を取り入れることは必要。授業への取り入れ方法を考えることで、より全体のこども達がかかわることができる。教職員まかせでなく、地域の大人がWG員として上手にかかわり進めていくことが必要不可欠。ホームページや、地域での会議時に広報して協力を求めていきたい。